

文芸OGネットワーク通信



Vol. 19

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1

共立女子大学文芸メディア研究室内

文芸OGネットワーク 代表 高橋 京子

Te l / Fa x 03-3237-2681

発行：2013.9.28

URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

● 文芸OGネットワーク総会 開催される ●

平成25年度OGネットワーク総会は、6月1日(土)、パレスサイドビル9階 レストラン アラスカにて開かれた。今年は文芸OGネットワーク創立10周年にあたり、記念行事として、総会に引き続き祝賀会が開催され、記念品の配布等も行われた。会員の参加者は、56名であった。

定期総会

司 会 川瀬治子

代表挨拶 稲見和子

- ① 平成24年度活動報告：OGネットワークの活動、資料整理、在校生支援、会報等の昨年度の活動と、今年度の予定についての報告があった。
- ② 平成24年度収支報告：会計からは昨年度の収支報告があり、監査より、監査の結果、間違いなしとの報告があった。平成25年度予算案が承認された。
- ③ 役員改選の件：今年は役員改選の年にあたり、第6期の新役員が選任・承認された。



文芸OGネットワーク第6期役員

代 表	高橋京子
副 代 表	下村陽子
	川瀬治子
総 務	稲見和子
	斎藤和子
	川邊 恵
	窪田智子
共 立 祭	小林豊子
(補佐)	仙葉弘子
会 報	大友佳代子
	小池恵己子
	酒井康子
	土田富美子
(兼務)	高橋京子
資料整理	多田久恵
(兼務)	川瀬治子
会 計	恩田香子
	村上智子
(兼務)	下村陽子
会計監査	沢野紀子
	藤田喜久子

ごあいさつ 代表 高橋京子



このたびは、創立10周年を迎えた「文芸OGネットワーク」の代表を引き継がせていただくことになり、身の引き締まる思いです。諸先輩方の母校への篤き思いから出発し、コツコツと活動を積み上げてこられた足跡を今後も途絶えることのないよう、一心に務めてまいります。

当分は、前任者の稲見さんをはじめ、役員の方々に手とり足とり教えていただきながらの、たどたどしい歩みになるかと思いますが、一歩ずつ皆様と共に歩みを重ねていけたらと思っております。どうか今後とも温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

「文芸OGネットワーク創立10周年記念祝賀会」開かれる

6月1日、文芸OGネットワーク創立10周年記念祝賀会が、パレスサイドビル内、レストラン アラスカにて行われました。東京近郊のみならず、北は札幌市、南は大分県から会員が集まってくれました。



初代代表、百瀬好子さんの「仲良し会ではなく、学部のため、学校のため、学生のため、そして会員相互のために今まで活動してきました」という言葉に始まり、学長の入江和生先生には、お祝辞を賜り、村上隆学部長には、乾杯の音頭をとっていただきました。歓談とお食事をはさみ、ご出席いただいた、内田保廣先生、北村弥生先生、近藤瑞男先生、坂口麗衣先生、塩川浩子先生、鈴木国男先生、染木泰子先生、沼田知加先生には、ご紹介を兼ねてお言葉をいただきました。先生方のユニークなお言葉に、会員の皆様から笑みがこぼれていました。



次に、OG ネットの歴史を DVD で振り返りました。映像が流れると、この10年間の活動が本当に意義深いものであったということが分かりました。

ゲストには、テノール歌手の志摩大喜氏をお迎えしました。ヘンデルの「かつて木陰は」、スカルラッチェの「ガンジス川より日は昇り」、プッチーニのトゥーランドットから「誰も寝てはならぬ」、「千の風になって」、「女心の唄」の5曲を歌っていただきました。そして再びDVD「セピア色の思い出」が流れたときには、あちらこちらから喚声が上がリ、当時のことが懐かしく思い出されました。

最後に、稲見和子さんからの「これからもOGネットワークを可愛がってください」という閉会の言葉と写真撮影で会は終了致しました。あっという間の2時間でした。その後も、学年を超えての懐かしい人たちとの会話は尽きず、それぞれに素晴らしい時間を過ごせたようです。

10年という節目に、今後のOGネットワークの益々の発展を願うと共に、これからも心新たに、責任を持って活動していかなければいけないという決意が生まれました。

在校生支援

第6回目は。。。

出版、編集を希望する学生さんを対象に7月6日(土)本館108号室にて開催された。



今回は、“出版・編集関係の仕事に就きたい”という学生さんを対象に開催した。ゲストには、雑誌編集者を経て現在はマップ制作会社に在籍する文芸学部OGの北村優子さん(H1卒)を迎えて、お話しいただいた。ナビゲーターはOGネットの窪田智子・高橋京子。

参加者13名からは、編集作業のプロセスやインタビューの心得など、具体的な質問が飛び交い、活気溢れる会となった。こうした学生さんたちとの出会いをその場限りにとすることなく、今後は、学生自身が、具体的な製作活動に携わっていただけるように、OGネットがサポートできたらと考えている。

高橋京子 (H1卒)

連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々⑤ —

今回は、4期生の国武礼子さんと松尾慶子さんに学生時代の思い出などについて書いていただいた。

卒業から半世紀以上も経って…

私は昭和31年入学、35年に卒業ですから学生時代から半世紀以上も経っています。

入学した頃、竹橋あたりには東京空襲跡の瓦礫がまだ残っていました。

このごろ昭和30年代を懐かしみ「いい時代だった」という話を聞きますが、私もそう思います。あの明るさは何だったのでしょうか。小・中・高校と学校がとにかく楽しいところでした。神保町には映画館がいくつかあり、エルビス・プレスリーのデビュー映画の看板が立てられていました。戦争中の暗い暮らしかから解放され、映画、音楽、演劇など活気があり面白い時代でした。ラジオはNHKのみでしたのに民間放送が次々にスタートし、昭和30年代はテレビ局も開局ラッシュでした。経済的にはまだまだ高度成長の前ですから貧しかったのですが、日に日に環境がよくなる実感がありました。沖縄出身の人

がドルで仕送りをされていた時代です。

昭和28年頃の高校進学率は全国平均で4%でしたから、4年制大学へ進学するのは家庭環境が良くなければできなかったことでしょう。にもかかわらず、のほほんど勉強もせず過ごしていました。就職難でやっと地方の放送局に決まろうとしたとき、地方へ行くなどんでもないと母の猛反対でつぶされました。これも母にすれば当たり前の時代です。

家庭を持ち3人の子供に恵まれ、それぞれが幸せな家庭をつくり子供を育てています。人生は営々とつなげていくことと思うようになりました。

いまは読書の時間が十分にあるので新聞や雑誌の書評欄で面白そうな本を見つけ、重たいから本屋に行かないでAmazonで取り寄せ、いつも読みかけの本が4冊くらいあると満足しています。

国武礼子 (S35 卒)

言葉

今をさかのぼること50余年前、私がまだうら若き20代の文芸学部学生の際に受講した「哲学」の授業で、先生が言われた言葉があります。それは、あなた方は「永劫の一瞬」に生きているのですよと、おっしゃった言葉です。この言葉の持つ意味は一体何なのか、今日までずっと私の心の中にありました。私にとっては重く、深く、とてつもなく大きすぎる言葉でした。

そしてあの2011年3月11日の東日本大震災。余震がまだ強く東京を襲う中、私は武蔵野日赤病院で初めて4時間余に及ぶ心臓手術を受けました。2年間の予後経過も良く主治医の先生から「もう大丈夫ですよ」と言われた時、私はまだ私自身に命のある有難さをしみじみと感謝いたしました。

今から137億年前宇宙が誕生し、46億年前に私たちの

太陽系が誕生して地球が生まれた、という気の遠くなるような時の流れの中のその「一瞬」の時に生きてここに居るという不思議さ、と同時に「一瞬」にしか居ることが出来ない私たちの切なさ。私が「永劫の一瞬」に生かされているのだというよろこびと哀しみの目で見れば、何もかも美しく、いとおいしい。この瞬間に私の心は何故か軽くなりました。

私にもし許されるのであれば、今まで以上に、これから大好きなモーツァルトの音楽を心で聴いていきたいと思ったのです。35年の短い命を「一瞬」に生き切った証しのモーツァルトの音楽は、私を魅了し続け生きるよろこびを与えてくれます。「永劫の一瞬」という言葉は今私の心の中に、かけがえのない大切な宝物を手渡してくれました。

松尾慶子 (S35 卒)

《 広場 》

◆宝塚ポスター展◆

「宝塚歌劇と世界の音楽劇」と題して日本演劇学会2013年度全国大会が、6月21日～23日に開催された。大会実行委員会が共立女子大学神田一ツ橋キャンパス内に置かれ、文芸学部の鈴木国男教授が委員長を務めた。研究発表の一部が本館でも行われ、本館ロビーではそれに関連して、共立女子大学総合文化研究所の展示「宝塚ポスター展」が6月17日から28日まで開催された。古いものから新しいものまで、華やかなポスターがロビーいっぱい展示され、他に古い宝塚関連の冊子、戦前のプログラム、レコードや楽譜、チケット、プロマイド、葉など、珍しい貴重な資料も展示されていた。OGネット会員関係者も一部資料を提供した。

共立女子大学・共立女子大学桜友会共催 第7回地方講演会に出席して

6月29日長野県松本市キッセイ文化ホールにおいて、松本市文書館館長の小松芳郎先生が、「信州が生んだ教育者—鳩山春子の目指したもの—」と題する講演を行いました。

鳩山春子は、文久元年（1861年）3月、松本藩士多賀努の末っ子として生まれました。小さい時から優秀だった春子を見て父は、明治7年、春子13歳の時に東京に連れてきて、当時日本で唯一の女学校だった竹橋女学校に入学させました。英語は米国婦人から教育を受け、飛び級で進級するなど優秀な成績でした。その後東京女子師範学校に進み、卒業後すぐに母校に就職しました。鳩山和夫と結婚して一郎、秀夫の二人の子供の母になってからは、毎朝3時半に小学生の子供を起こし、登校前に数学・英語・漢文を教え込み、そ

れが10年間続いたとのこと。その結果、春子は50kgだった体重が10年間で32kgにまでなったそうです。また、東京女子師範学校の教職とともに、明治19年共立女子職業学校（現在の共立女子学園）を設立し、その教授（のちに校長）も兼ねるなど一般子女の教育にも尽力しました。

春子は、父が男尊女卑の考えが強く、母を馬鹿呼ばわりしていたことから、母を当時尊敬できなかったとの思いがあり、和夫と結婚したとき、子供の前では私を叱らないでほしいと頼んだそうです。また、一郎、秀夫に対し、父は友達、母は教師という家庭を目指したとのこと。

以上、共立女子大学の生みの親の春子先生の様々な逸話をご紹介いただきました。

川邊 恵 (S47 卒)

劇芸術資料室から

演じる人より見る人 —資料整理をしながら思ったこと—

金と緑に青のぼかし、屏風を思わせるような緞帳がゆっくりと上がって、舞台に現れたのは「杉村春子」、少々重い目覚め、夢であった。

一度受けてみたかったオーディション（当時私は68歳）、入った劇団で最初にやらされたというより試された役は、杉村春子のために書かれた作品であった。舞台の知識も経験もない私は、いったいどうしたらよいのか、分からないことばかりであった。杉村春子は年齢や生活の状況に関係なく、手足の動かし方から声の出し方、体の向きの決め方まで出来る。私になにが出来る、なにをしようとしていたのか。

通行人でもよい、舞台に立ってみたい、子供の頃よく父につれられて行った明治座の舞台に立ちたいという思いはあとかたもなく消え、思い出だけが残った。私は演じる人ではなく、所詮見る人だったのだ。

鈴木道子 (S38 卒)

掲 示 板

共立祭参加

日時：10月19日（土）、20日（日）

会場：本館310号室

展示：「河竹黙阿弥 —江戸から東京へ—」

※会場ではバザーも開催します。バザーの品をご提供くださる方は、当日直接会場にお持ち込みください。

編 集 後 記

10周年の節目を迎え、旧友、会員同志、そして学校とのつながりの大切さを改めて感じた。今後の活動をさらに発展させるためにも、このつながりを大切にしていきたいと思う。そして、会報を通して、会員の声、今の学校、学生の様子などを会員の皆さんに伝えていきたいと思う。

(O)